中国的建★築処世術

東福大輔＋市川紘司
編著

彰国社

中国的建築処世術

東福大輔＋市川紘司
編著

彰国社

はじめに

中国で起こりがちな諸問題、
その「傾向と対策」として

東福大輔＋市川紘司

1990年代以降、経済成長と都市化が進展する中国では、国内外の建築家、組織設計事務所、ゼネコン、ディベロッパーが入り乱れて、大量の建築物をハイスピードで建設しています。日本の設計事務所やゼネコンの中国進出も、もちろん少なくありません。日本の建築の高い質は、中国でもよく知られているところです。たとえ日中関係が一時的に悪くなったとしても、つねに一定量の需要は存在すると言えます。

しかし、日本人がいざ実際に中国で建築の現場に携わってみると、多くの問題が生じることになってしまいがちです。クライアントの要望、スケジュールやコストの調整、建材の調達といったさまざまな側面で「思いどおりにいかない」事態が起こってしまう。そしてプロジェクトの進行は遅れ、要らぬ軋轢が起こったり、本来得るはずだったチャンスや対価をのがしてしまうことさえある。

ただし、こうした「問題」の根は、じつはさほど深くないのではないか。むしろ、「中国では建設プロジェクトの進められ方が日本とはずいぶん異なる」という点さえ事前に理解しておけば、回避できる問題が実際のところ多いのではないかと筆者たちは考えます。日本にとって中国は、姿形が似た人間が住む距離の近い隣国ですが、生活上の価値観から国家の諸制度など、あらゆる点でまったく「異質」の場所です。そのことをきちんと理解すれば、中国でのプロジェクトがスムーズに進展する可能性はきっと高まるはずです。

本書は、こうした中国のプロジェクトがもつ特徴的なルールや慣習をまとめたものです。中国では誰がどのようにして建築を設計し、着工し、竣工させるのか。そのプロセスの全体像を可能な限りクリアにしようと意図しました。

第一章では、設計院やディベロッパーなど、中国のプロジェクトを動かすメインプレイヤーたちを紹介します。第二章では、中国の設計実務が実際にどのようなプロセスで進んでいくのかを概観しています。第三章で考察したのは、別荘地開発や政府ビルなど、中国に特徴的なビルディングタイプです。そして第四章では、とくに日本人が中国で建築活動をおこなううえで気をつけるべきポイントを挙げました。また、以上の本文とは別に、中国で活躍中の山代悟氏と万谷健志氏へのインタビュー、そしてより若い世代の建築家８名へのアンケートを収録することで、多くの角度から中国建築の問題と可能性を考えています。

中国はヨーロッパがすっぽりと収まってしまうほどの巨大国家です。ゆえに本書で書かれた40のトピックスが、この国で起こりうる問題のすべてを網羅した「マニュアル」となるのは不可能です。とくに中国では最終的には人と人との信頼関係が重要であったりして、つまるところ個別の問題については先方の様子を見ながらケースバイケースで対応するほかない、と言えるのかもしれません。

しかし、そうした個別に異なる問題にも通底する制度的、歴史的背景があり、全体的な「傾向」とその「対策」があります。本書が「対策」を編み出すための参考書として、多くの日本の方々に中国的建築事情を理解していただき、中国でプロジェクトを成功させる下地づくりの一助になることを願っています。

目次

はじめに ―― 2

第一章　中国建築を動かすプレイヤーたち

【 一 】 中国の建築はすべて政治的な駆け引きから生まれる ―― 10
【 二 】 国内外のディベロッパーが交じり合う開発業界 ―― 14
【 三 】 中国のディベロッパーはワンマン経営である ―― 20
【 四 】 土地の使用権が払い下げられることで開発は始まる ―― 25
【 五 】 「メンツ・プロジェクト」とは何か？ ―― 29
【 六 】 外国人設計者の大事なパートナー「設計院」とは何か？ ―― 32
【 七 】 建築師とはどんな職業か？ ―― 37
【 八 】 中国のアトリエ建築家は「本土化」する ―― 40
【 九 】 施工業は国内企業がシェアの大半を占める ―― 43
【 十 】 建材の決定はカタログで済ませず、実物を見に市場へ！ ―― 46
【 十一 】 出稼ぎ労働者たちが建設現場を動かす ―― 49

第二章　中国建築が生まれるプロセス

【 十二 】 中国建築設計の３つのフェーズ ―― 60
【 十三 】 方案設計〉「面食い」な建築が生まれる理由 ―― 64
【 十四 】 建築パースとは「図面」である ―― 69
【 十五 】 分離する外装と内装をいかに接続するか ―― 73
【 十六 】 初歩設計〉「普通」ではないプロジェクトのためのフェーズ ―― 77
【 十七 】 中国人は照明が好き ―― 80
【 十八 】 施工図設計〉ここで描かれた図面がそのまま建ち上がる ―― 83
【 十九 】 均質的な都市風景を生む「標準設計」図書とは何か？ ―― 87
【 二十 】 不測の事態に振り回されながらいかに現場を監理するか ―― 91

第三章　中国式ビルディングタイプ考：インテリアから都市計画まで

【二十一】 インテリアレイプ!?　建築の全体性を放棄せよ ―― 108
【二十二】 塔楼と板楼〉「一般解」化する集合住宅 ―― 112
【二十三】 小区〉閉鎖志向の建築と都市 ―― 117
【二十四】 超豪邸〉戸建住宅をつくる数少ないチャンス ―― 120
【二十五】 大学城〉都市としてのキャンパス ―― 123
【二十六】 店中店〉中国におけるワン・ストップ・ショップの難しさ ―― 128
【二十七】 不自由な文化施設〉政治家の手柄？ 宅地開発のオマケ？ ―― 131
【二十八】 重視される都市計画〉ゾーニングと分散配置 ―― 135

装丁・デザイン：坂 哲二（Bang! Design,inc.）
本文デザイン：佐藤ちあき（Bang! Design,inc.）

【二十九】　都市のなかの農村〉非合法建築が集まるスラム ―― 139
【 三十 】　ぜいたく三昧の政府庁舎〉汚職の温床として建設禁止へ ―― 142
【三十一】　保存と開発〉テーマパーク化する歴史的空間 ―― 145
【三十二】　人防〉非常事態にそなえた地下空間 ―― 149

第四章　日本人が気をつけるべき中国建築事情

【三十三】　中国人クライアントが日本の設計者に期待することとは？ ―― 166
【三十四】　設計料とキックバック〉
お金の話は中国人パートナーに解決してもらおう ―― 170
【三十五】　反日感情の高まりは設計活動に影響するのか？ ―― 174
【三十六】　「小気」と「設計不足」〉
日本人設計者を悩ませる２大問題 ―― 177
【三十七】　風水と付き合う〉
自然と人間の調和を重んじる「天人合一」思想 ―― 181
【三十八】　多様なる「中国的なもの」〉広大な国土を反映 ―― 187
【三十九】　活況を呈する中国建築メディア ―― 191
【 四十 】　つねに変化しつづける「中国事情」〉
2010年代の政府とディベロッパー ―― 194

Column

スター建築家を招集せよ！まとめて消費される建築家たちのアイデア ―― 53
「山寨建築」とは何か？　中国のコピー文化と建築デザイン ―― 197

Interview

中国のボトムアップの強靭さ。その近未来のために　山代悟 ―― 94
中国のショッピング、クリエイティビティに応える　万谷健志 ―― 152

アンケート

中国で活動する若手建築関係者に聞くリアルな中国事情 ―― 201

おわりに ―― 219
編著者略歴 ―― 222
写真・図版クレジット ―― 223

＊本文中、【一】【二】【三】など【 】内に記した漢数字は、各トピックの番号を示している。
参照してほしいトピックは、【☞六】といった形式で示している。

第一章

中国建築を動かすプレイヤーたち

【一】中国の建築はすべて政治的な駆け引きから生まれる

中国で建築設計の実務をはじめてみると、あらためて建築物がもつ政治性に気づくことになるはずだ。もちろん、日本で建築をつくる際にも政治的な要素は多分にあるのだが、中国の場合はそれがあまりにもあからさまなのである。建設地の決定、設計者の決定、設計案の決定、建材の決定……。こういったすべての決定フェーズのなかで、施主のトップや施主側の担当者、地元政府、都市計画局といった異なるプレイヤーが多数参加し、それぞれが異なる目論見をもって動く。建築のプロジェクトとは、こうしたプレイヤーたちによる壮大な駆け引き（ゲーム）であるかのようにさえ思えてくる。

そしてそのゲームは、ささいなきっかけでバランスが崩れ、プロジェクトの基本方針からひっくり返る危険性に満ちている。こうした状況のなかで、建築設計者はどのように振る舞えばよいのだろうか？　少しでも優れた建築物をデザインし、さらには少しでも設計料を多く、かつ早く受け取るためには？

まずは、この中国建築が生まれるゲームのルールを知り、あらかじめ「傾向と対策」を練る必要がある。中国で設計をする限りにおいて、さまざまなプレイヤーとの政治的な駆け引きからのがれて粛々と自分の好む空間をつくる、といった**アーティスト的な振る舞いは基本的に不可能**であると言ってよい。

※1　UIA：国際建築家連合。国際的な設計競技の標準化と運営をユネスコから委嘱されている。これまでに、シドニー・オペラハウス、ポンピドゥ・センター、東京国際フォーラムなどの大型国際コンペを運営している。

これは世界的なスター建築家といえども例外ではない。泥くさい駆け引きをうまく乗り切り、主導権を握った建築設計者のみが、自分の意に沿った建築を残すことができるのだ。多くの成功した中国人建築家が「職人気質」な設計巧者ではなく、どちらかと言えばプロモーション活動や演説といった**「政治的ビヘイビア」**に長けたタイプである理由は、中国建築業界のこうした土壌によるだろう。

たとえば、日本の建築関係者であれば誰でも知っているであろう《中国中央電視台（CCTV）本部ビル》（2012）。この建築は、設計者を選ぶために2002年に国際コンペがおこなわれたが、そのプロセスはUIA[※1]の指針に沿った「国際標準」の手順からはほど遠いものとなった。審査会はアメリカの建築評論家チャールズ・ジェンクスを中心に編制されていたが、彼らには3つの案に絞り込む権限までしか与えられず、最終決定は政府首脳の判断に委ねなければならなかったのである。最終的に、このコンペに勝利したのはOMAとなったわけだが、その理由は2本の高層ビルを上層部で連結させるという類例のないデザインが喝采をもって受け入れられたというよりもむしろ、事務所代表のレム・コールハースみずからが北京に乗り込み、**熱烈なロビー活動**をおこなったことのほうが大きい。

《CCTV本部ビル》のように、中国では、国際コンペが政治的な事情によって振り回されることが多々ある。天安門広場の西側・人民大会堂の

ポール・アンドリュー《中国国家大劇院》2007
首都・北京の中心部に建つタマゴのような建築

裏手に建てられた《中国国家大劇院》(2007) もその1つである。フランス政府を巻き込んで売り込みをおこなったポール・アンドリューが勝利したこのコンペでは、当初予定されていなかった2段階審査がおこなわれている。これは、1997年12月におこなわれた最初のコンペで審査会から高い評価を得ていた磯崎新による設計案をリジェクトするためのプロセスであったと言われている。北京の中心部に日本人建築家の作品を建てることを政府側が快く思わなかったわけだ。その後《中国国家大劇院》は隣の人民大会堂から政府首脳が現場を眺めてコメントを発するたびに工事がストップし、変更が加えられたというから大変である。結局最終的にオープンしたのは、コンペ開催から10年を経た2007年12月となった。

かように設計案の決定から竣工にいたる各段階でさまざまな干渉に振り回され、そのたびに駆け引きが必要とされる場所が中国なのである。おそらく日本人に多いであろう「職人肌」の建築設計者にとっては煩わしいことこのうえないだろうが、しかし逆に言えば、日本での設計業務にはないある種のダイナミズムや、建築をつくり終えたときにクリアした爽快さが得られるのも、中国での建築設計ならではである。

OMA《CCTV本部ビル》2012　2002年のコンペののち、紆余曲折を経て2012年から使用を開始

Interview

中国のショッピング、クリエイティビティに応える

聞き手｜市川紘司

万谷健志　まんたに けんじ

建築家

1968年福岡県北九州市生まれ。1995年九州大学大学院建築学科修了。1995年香港大学建築学部留学。1996〜2003年OMA　Asia（香港）に勤務。2003〜2009年HMA建築設計事務所共同設立。2009年上海万谷建築設計設立、現在にいたる

OMA Asiaを経て、上海で独立

——1995年に香港大学に留学し、その後、香港のOMA Asiaに勤めています。その経緯をお聞かせください。

万谷｜　当時、僕は学生でしたので、プロフェッショナルな理由ではないんです。「香港のごちゃごちゃした建物がカッコいい」という、ちょっとした「香港ブーム」が当時あったんですね。僕自身も旅行したりしていたんですが、それに飽き足らずに香港で暮らしてみたいと思うようになったわけです。建築史家の村松伸さんもちょうど香港建築の本を出していた時期で、香港でよく会っていました。OMA Asiaには、香港大学で修士の1年目が終わった夏にアルバイトで行ったのが最初なんですが、多くのプロジェクトが動いていて大学には戻れなくなってしまいました（笑）。それで結局中退することにして、OMA Asiaに就職したんです。

——OMA Asiaではどのようなプロジェクトを担当されたのでしょうか。

万谷｜　1997年の返還に向けて、香港ではイギリスの最後の投資の波があって、ヨーロッパ系の建築家が香港に事務所をかまえるブームがありました。「アジアに行ったら好きなことをやらせてもらえる」みたいな感じで、ノーマン・フォスターやレンゾ・ピアノなどが来ていて、たぶんレム・コールハースもその熱気を感じていたのではないでしょうか。それでハーヴァード大学のレム研究室の卒業生5人が集まって、レムが出資してできたのがOMA Asia香港事務所です。だから最初は大学のゼミみたいな事務所でした。僕が在籍した7年間で事務所は大きくなって、最後には25人ぐらいまでになりましたが。

1996、97年くらいは非常に忙しくて、入所してすぐに香港のオフィスビルのプロジェクトを3つほどドカドカと担当しました。でも1998年にはアジア金融危機がありましたよね。香港もひどいことになって、OMA Asiaも仕事が激減して、OMAのロッテルダム事務所経由のプロジェクトをけっこうやっていました。2000年ぐらいからは景気が持ち直して、韓国でのプロジェクトが多く入ってきました。僕は《Wホテルソウル》を主に担当していました。いわゆるデザイナーズホテルのはしりみたいなもので、非常に凝ったデザインができるので3年間みっちりと関わりました。

——2003年には香港から上海に移り、設計事務所を共同設立されていますね。

万谷｜　なぜ香港を離れたかというと、やはり韓国でのプロジェクトはあっても香港の景気は非常に悪かったんですよ。1997年に中国に返還されてからずっとダウンしていた。香港マネーが中国に投資されるようになって、香港市内は「空洞化」とい

うか、すっからかんになってしまった。僕としても、マネーが香港から上海へと向かうのを肌で感じていました。香港市内ではもう建物が建たないわけです。建築家としてはやっぱり建つところに行かないと仕事が面白くないので、自然とマネーの流れを追うように「次は上海か」と決めて、ネットや人づてに情報を収集して、事務所を共同設立する話が進んだわけです。ただ僕は当時、香港という土台はあったけれど全然「中国慣れ」はしてなくて、中国は人脈の世界だからプロジェクトが取れるかどうか、非常に大きな不安を抱いたままスタートしました。というか、不安を感じるほど賢くなかった（笑）。

《八号橋》から生まれた創意園

万谷｜　でもラッキーなことに、すぐに《八号橋》というプロジェクトが取れました。これが最初になかったらと思うといまでもゾッとしますが、じつはこの《八号橋》のオーナーは香港人で、僕がOMA Asiaにいたときに知り合っていた方だったんですね。ある日、《上海新天地》でたまたまその人に出くわしたんです。それで「今度工場を買って改修する予定で2社にプロポーザルをつくってもらっているんだけど、君も何か出す？」と言われて、やることもほかにないですし、ふたつ返事で「出す、出す」と（笑）。それでうまいこと採用してもらってスタートしたんです。

この《八号橋》みたいなプロジェクト、つまり工場を改修してクリエーターが入るようなスペースをつくるプロジェクトは、現在中国では「創意園」と呼ばれています。

HMA建築設計《八号橋》2004　古い工場を改修し、働く、住む、遊ぶという機能を混在させたこのプロジェクトは国内外で話題になり、イタリアの建築雑誌『DOMUS』にも取り上げられた

しかし当時はこの名称もなかった。香港人のオーナーにはヴィジョンがあって僕にどういう改修をするのか説明するんですが、僕も最初は「誰がこんなボロいところを借りるんだ」と半信半疑でした。僕自身もプロジェクトの理念が100%は分かっていなかったんですね。《八号橋》に関しては、あのボロい工場を見初めたディベロッパーをいまでもすごいなと思います。

――現在の上海には「創意園」と呼ばれる開発形態が多く見られますが、その元祖が《八号橋》ということでしょうか。

万谷｜　そうですね。《八号橋》が成功したことで、上海市の役人が見に来たんですが、こういう開発形態に名前を付けてやると言いだしたんですよ（笑）。それで